

# 数学I 模擬試験問題 2014年5月14日(水)

- ・問題用紙 1枚、解答用紙 1枚、計算用紙 1枚
- ・なるべく、答案用紙の表に問題1と2，うらに問題3と4を解答してください。
- ・本やノートは見てかまいませんが、ほかの人と相談したりほかの人の答を写したりしてはいけません。

問題1  $-1 \leq s \leq 1, -1 \leq t \leq 1$  とする。

(1)  $-1 \leq s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t \leq 1$  を示せ。

(2)  $\sqrt{1-s^2}\sqrt{1-t^2} \geq st$  ならば  $\arcsin s + \arcsin t = \arcsin(s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t)$  であることを示せ。

問題2 次のようにして  $e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$  を示せ。

(1)  $n \geq 1$  を自然数とする。 $x > -n$  ならば  $e^x \geq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$  であることを示せ。

$x < n$  ならば  $e^x \leq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n^2}\right)^{-n}$  であることも示せ。

(2)  $0 \leq t \leq n$  ならば  $1 - \frac{t}{n} \leq \left(1 - \frac{t}{n^2}\right)^n \leq 1$  であることを示せ。

(3) (1) と (2) を使って、すべての実数  $x$  に対し  $e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$  であることを示せ。

問題3  $f(x)$  を閉区間  $[0, 1]$  で定義された関数とし、 $f(0) \leq t \leq f(1)$  とする。数列  $(s_n)$  を、次の (i) と (ii) で帰納的に定める。

(i)  $f\left(\frac{1}{2}\right) \geq t$  なら  $s_1 = 0$  とおき、 $f\left(\frac{1}{2}\right) < t$  なら  $s_1 = \frac{1}{2}$  とおく。

(ii)  $n \geq 1$  とし、 $s_1, \dots, s_n$  が定まっているとする。 $f\left(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}\right) \geq t$  なら  $s_{n+1} = s_n$  とおき、 $f\left(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}\right) < t$  なら  $s_{n+1} = s_n + \frac{1}{2^{n+1}}$  とおく。

すべての自然数  $n \geq 1$  に対し  $f(s_n) \leq t \leq f\left(s_n + \frac{1}{2^n}\right)$  であることを、 $n$  に関する帰納法で示せ。

問題4  $f(x)$  を开区間  $(a, b)$  で定義された微分可能な関数とし、 $(a, b)$  で  $f'(x) \geq 0$  であるとする。

(1)  $q > 0$  を実数とする。次の定理を  $g(x) = f(x) + q \cdot x$  に適用して、 $a < s < t < b$  ならば  $f(s) < f(t) + q \cdot (t - s)$  であることを示せ。

定理  $g(x)$  を开区間  $(a, b)$  で定義された微分可能な関数とし、 $(a, b)$  で  $g'(x) > 0$  であるとする。 $a < s < t < b$  ならば  $g(s) < g(t)$  である。

(2)  $u, v$  を実数とする。「任意の実数  $q > 0$  に対し  $u < v + q$  ならば、 $u \leq v$  である」の対偶を求め、それがなりたつことを示せ。

(3) (1) と (2) を使って、 $a < s < t < b$  ならば  $f(s) \leq f(t)$  であることを示せ。

略解 1 (1)  $s = (s, \sqrt{1-s^2})$ ,  $t = (\sqrt{1-t^2}, t)$  とおけば,  $s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t$  は内積  $s \cdot t$  だから, その絶対値は  $|s| \cdot |t| = 1$  以下である.

(2)  $\alpha = \arcsin s$ ,  $\beta = \arcsin t$  とおくと,  $\cos(\alpha + \beta) = \cos \alpha \cos \beta - \sin \alpha \sin \beta = \sqrt{1-s^2}\sqrt{1-t^2} - st$  である.  $|\alpha| \leq \frac{\pi}{2}$ ,  $|\beta| \leq \frac{\pi}{2}$  だから,  $\sqrt{1-s^2}\sqrt{1-t^2} \geq st$  ならば  $|\alpha + \beta| \leq \frac{\pi}{2}$  である.  $\sin(\alpha + \beta) = \sin \alpha \cos \beta + \cos \alpha \sin \beta = s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t$  だから  $\alpha + \beta = \arcsin(s\sqrt{1-t^2} + \sqrt{1-s^2}t)$  である.

2 (1)  $e^x$  は凸関数だから  $e^x \geq 1+x$  である. よって,  $x > -n$  ならば  $e^x = (e^{\frac{x}{n}})^n \geq (1 + \frac{x}{n})^n$  である.  $x < n$  ならば,  $-x > -n$  だから  $e^x = (e^{-x})^{-1} \leq (1 - \frac{x}{n})^{-n} = (1 + \frac{x}{n})^n \cdot (1 - \frac{x^2}{n^2})^{-n}$  である.

(2)  $k = 2, \dots, n-1$  に対し  ${}_nC_{k+1} \left(\frac{t}{n^2}\right)^{k+1} = {}_nC_k \left(\frac{t}{n^2}\right)^k \cdot \frac{n-k}{k+1} \frac{t}{n^2}$  である.

$\frac{n-k}{k+1} \frac{t}{n^2} \leq \frac{n}{1} \cdot \frac{t}{n^2} \leq 1$  だから,  ${}_nC_{k+1} \left(\frac{t}{n^2}\right)^{k+1} \leq {}_nC_k$  である. よって,  $1 \geq \left(1 - \frac{t}{n^2}\right)^n = 1 - n \cdot \frac{t}{n^2} + {}_nC_2 \left(\frac{t}{n^2}\right)^2 \pm \dots + (-1)^n {}_nC_n \left(\frac{t}{n^2}\right)^n \geq 1 - \frac{t}{n}$  である.

(3) アルキメデスの公理より,  $|x| < m$  をみたす自然数  $m$  がある.  $n \geq m$  ならば  $-n < x < n$  だから (1) より,  $e^x \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n^2}\right)^n \leq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n \leq e^x$  である. さらに  $n \geq m^2 \geq m$  とすれば (2) より,  $e^x \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n}\right) \leq e^x \cdot \left(1 - \frac{x^2}{n^2}\right)^n \leq \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n \leq e^x$  である.  $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{x^2}{n} = 0$  だから, はさみうちの原理より  $e^x = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{x}{n}\right)^n$  である.

3  $n=1$  の場合を示す.  $f(\frac{1}{2}) \geq t$  なら  $s_1 = 0$  だから,  $f(s_1) = f(0) \leq t \leq f(\frac{1}{2}) = f(s_1 + \frac{1}{2})$  である.  $f(\frac{1}{2}) < t$  なら  $s_1 = \frac{1}{2}$  だから,  $f(s_1) = f(\frac{1}{2}) < t \leq f(1) = f(s_1 + \frac{1}{2})$  である.

$n$  についてなりたつとし,  $n+1$  の場合を示す. 帰納法の仮定より  $f(s_n) \leq t \leq f(s_n + \frac{1}{2^n})$  である.  $f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) \geq t$  なら  $s_{n+1} = s_n$  だから,  $f(s_{n+1}) = f(s_n) \leq t \leq f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) = f(s_{n+1} + \frac{1}{2^{n+1}})$  である.  $f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) < t$  なら  $s_{n+1} = s_n + \frac{1}{2^{n+1}}$  だから,  $f(s_{n+1}) = f(s_n + \frac{1}{2^{n+1}}) < t \leq f(s_n + \frac{1}{2^n}) = f(s_{n+1} + \frac{1}{2^{n+1}})$  である.

よって  $n$  に関する帰納法により, すべての自然数  $n \geq 1$  に対し  $f(s_n) \leq t \leq f(s_n + \frac{1}{2^n})$  がなりたつ.

4 (1)  $(a, b)$  で  $g'(x) = f'(x) + q > 0$  だから, 定理を  $g(x) = f(x) + q \cdot x$  に適用すれば,  $a < s < t < b$  ならば  $g(s) = f(s) + q \cdot s < g(t) = f(t) + q \cdot t$  である. よって,  $a < s < t < b$  ならば  $f(s) < f(t) + q \cdot (t-s)$  である.

(2) 対偶は「 $u > v$  ならば, 実数  $q > 0$  で  $u \geq v + q$  をみたすものが存在する」となる.  $u > v$  ならば,  $q = u - v > 0$  は  $u \geq u = v + q$  をみたすから, 対偶がなりたつ.

(3)  $a < s < t < b$  とする.  $q > 0$  を実数とし, (1) を  $\frac{q}{t-s} > 0$  に適用すれば  $f(s) < f(t) + \frac{q}{t-s} \cdot (t-s) = f(t) + q$  がなりたつ. よって任意の  $q > 0$  に対し  $f(s) < f(t) + q$  がなりたつから, (2) より  $f(s) \leq f(t)$  である.